

2010年9月18日

Fareed Zakaria, *The Post-American World* (New York: W.W.Norton & Company, Paperback, 2009)

浦上 清  
浦上アジア経営研究所

*Growth takes place whenever a challenge evokes a successful response that, in turn, evokes a further and different challenge. We have not found any intrinsic reason why this process should not repeat itself indefinitely, even though a majority of civilizations have failed, as a matter of historical fact.*

Arnold J. Toynbee  
*A Study of History*

## はじめに

私がこれから書こうとするものは Fareed Zakaria 氏の著作の書評でも内容の紹介でもない。私が Zakaria 氏の著作を読んで感じたことに関する簡単なメモ書きである。

このベストセラー著作は Zakaria 氏のジャーナリストとしての優れた感性とエネルギーな活動を基底に持つものである。そして何よりも氏の国際的な感覚に基づく洞察力に対して敬意を表したいと思う。著者は 1982 年、18 歳でインドから渡米し、教育を受け、現在はニューズウィークのジャーナリストとして活躍し、既にベストセラー著作を何冊も世に出しておられる。

本書については、日本で既に邦訳版が出ているが、できれば原書をお読みいただければと思う。

どのような著作についても言えることであるが、著書や論文についてはいろんな角度からの読み方ができる。以下は、私がこの著作を読み、考えたことに関する私自身のまとめである。

## 「アメリカ後の世界」は既に眼前にある

世界の半導体企業でトップの座に就いているインテル社の元会長兼 CEO、アンディー・グローブ氏は「アメリカはヨーロッパのあとを追うように落ち行く危険な状態にある

のに、アメリカでは誰もこのことを知らない」と率直な意見を述べたという(40頁)。アンディー・グローブ氏は、ハンガリー革命時にアメリカに移住し、フェアチャイルド社勤務を経て、インテル社に入社。1987年、同社のCEOに、そして1997年には同社の会長兼CEOに就任している。私も企業勤務時代、主として半導体製品事業に携わってきたが、「産業の米」ともいわれるこの業界にいと世界の産業界の趨勢が意外とよくみえる。

「アメリカが衰退しているのではなく、むしろ“その他の世界”が台頭している」(1頁)といったほうが良いと思う。この意味では、「アメリカ後の世界」は既に私たちの眼前にある。しかしながら、変化は漸進的なものであり、「議論はされていてもなかなか理解されない」(1頁)。

### 相対化されるアメリカと近代化の経路

「アメリカはまだ世界を支配している。しかしながら、経済的、財政的、そして文化的な覇権が弱まっている」(218頁) ことについては多分認めてかからねばならないだろう。国際関係の世界でアメリカの覇権主義が持続的な弱体化の流れにあり、毎年のようにその他の国の台頭が続いている。この意味で、アメリカという国の存在は着実な相対化の曲線に乗っているのだ。

「かつて20世紀の時代に非西欧諸国が追求した近代社会制度のあり方は未来に向けた活動についてひとつの重要な質問を投げかけた。西欧化しないで近代化できるか。また、そもそも西欧的な近代化と非西欧的な近代化の間にはどのような違いが存在するか」(73頁)

私は、国家や経済の近代化や企業の国際化の道筋はひとつではなく、複数の経路が存在していると考えている。例えば、中国の学術研究者のなかには、西欧的な民主主義制度は中国的な歴史・風土のもとでは必ずしもうまく機能しないと考えているひとがいる。また、インド企業の経営リーダーたちの多くはインド社会の根っこのところに企業行動の軸を据えて動いている。インド企業にとっては、アメリカ企業の場合と異なり、株主重視の考え方そのものはより相対化されている。

### 複雑化する世界秩序

アメリカの地位の相対的な低下を前提に考えると、グローバルな世界での様々な秩序の形成と高度化に向けた活動には新しいアプローチが必要であろう。「これまでのように、アメリカがトップダウンの意思決定をおこない、それを有難く受け入れる(もしくは無言の)世界に告げることはない。プレーヤーが多くいる世界では、アジェンダの設定や連携の組み立て方自体がパワーの大切な部分になる。このようななかで、会議を取り仕切り、それぞれの独立した参加者をガイドするためには大変強いひとが必要となる」(233頁) 現在

の世界は、アメリカだけが話し続け、ほかの世界がただれそれを聞いているというような単純な構造にはなっていない。

### アメリカの強みと弱み

「アメリカの強みはまだ発展途上にあるアジアの国々と比べると歴然としている。ヨーロッパとの比較では差異はそれほど大きなものでないとアメリカ人の多くが考えている」(195頁)。

私は、アメリカの強みのひとつは“移民立国”という点にあると考えている。「純粋にアメリカ生まれのひとつという観点からみると、出生率の低さはほぼヨーロッパ並と言えよう。移民の存在がなければ、アメリカの経済成長もヨーロッパ並である。・・・(中略)・・・2006年に科学・工学の分野で博士号を取得したひとの40%が外国人もしくは移民であったし、情報科学の分野で見るとその比率は65%にも達する。2010年にはすべての学術研究分野での博士号取得者の50%が外国人もしくは移民になり、科学の世界だけをとるとこの数字は75%近くになるだろう。シリコンバレーの起業者の半数は第一世代のアメリカ移民である。・・・(中略)・・・彼らが母国に戻れば、イノベーション力も彼らとともに母国に旅することになる」(198頁)。

アメリカがこれまでと同じように創造力に富む社会を維持し続けるためには持続的な移民者の増加が国の基底になければならない。

### アメリカの政治家の問題

「今、アメリカの政治制度の問題は複雑な問題解決に向けた幅広い関係プレーを組み立てる能力をうしなしたという点にある」(211頁)。「アメリカは経済的にはまだ基本的な強さを維持している。しかしながら、政治となると高度の機能障害に陥っている」(211頁)。「困難なことは、医療問題、社会保険問題、税制改革問題などをとってみても、政党間の妥協がなければ前進することができないということである」(213頁)。

「ワシントン政府は世の中の大きな流れを見据えて自分たちの動きを調整することができるか。アメリカ政府は経済的かつ政治的な力関係のシフトという現実に対処できるか。このことは国内政策の領域というより、国際関係政策の領域で特に困難な課題である。ワシントン政府は、世界の多様な声と視点に耳と目を向けることができるか。自分たちが支配できない世界にどのように立ち向かえるか」(214頁)。

「世界の新しいパワーが台頭する時代に、アメリカは新しいルール、新しい行動、そして新しい価値観の確立を図る必要がある」(238頁)。

## まとめに代えて

「アメリカ後の世界で最も成功するために何をなすべきかをよく考え、実行しているのはアメリカの偉大な多国籍企業であろう」(234頁)。

政府の世界、そして政治の世界と一体何が異なるのかを考えてみたい。

企業は、常に変化し続ける市場環境のなかで、これまでの経営アプローチを見直し、発想の転換を含め、新しい経営の手法を常に考え、できることから思い切って実行に移さねば生きて行けない運命にあるということだと思う。新しい市場環境が企業に変革を迫る。

「ワシントン政府は、市場によるテストに向き合う必要もないので、彼らの外交的帝国主義がもはやアメリカにとって存在可能なものかどうかの判断すらつかないのだ」(234頁)。

私の本書の読み方は、私なりの考え方に基づいている。更に言えば、私の考え方の基底に「市場」>「企業」>「国家」というある種の不等号式が存在しているので、国を越えて活動する多国籍企業の活動に活路を見出そうとするのかも知れない。

「アメリカ後の世界」に活路を見出せるのは、常に変化する市場と向き合うことが宿命のアメリカの多国籍企業であるのかも知れない。

このような考え方に立てば、これからますますグローバル化する世界で、企業のイノベーション能力と国家を超えて生き残ろうとする動物的な本能が国家主権という存在に持続的な影響を与え続けることはある程度認めておかねばならないだろう。